



趣味は良き哉

谷 倉 泉



1. 釣り部 OB 会

「アッ、来たっ！」

石に腰掛け、朝食のオニギリを頬張りながら振り返ると、恩師の竿がしなっている。かすかに朝霧が残る中、サラサラと透き通った水が流れる溪流の川面でイワナが躍っている。

人里離れた秘境の宿から林道沿いをさらに車で1時間、宿の主人に運転をお願いして入渓したのはイヌワシが舞う大河の源流部である。携帯電話はもちろん繋がらず、冬には数メートルの雪が積もる豪雪地帯である。



写真-1 源流でイワナを手にする先生

「喜寿となる歳でもイワナが釣れたよ！」

先生の弾む声と笑顔が私の心配を吹き飛ばした（写真-1）。

「大丈夫、安心して釣れますよ！」この溪に誘った者としてホッと胸を撫でおろす。先生は毎年、源流部への挑戦は諦め、常宿の脇を流れる沢で竿を出しては小ヤマメと戯れていた。しかし、去年のOB会で「皆と上流に出掛けてイワナを釣りたい。」とつぶやいていた。

私も還暦を過ぎ、無理は出来ない歳だと自覚しているが、ここは隅々まで知るホームグラウンドである。今年は互いに手を取り合って溪流を渡河し、C&R（キャッチアンドリリース）を繰り返しながら型の良いイワナ数匹をキープできた。イワナはタッパに準備した味噌にまぶせば数日は傷まない。先生は帰ってからのお酒が楽しみだと至極ご満悦であった。

せせらぎの水音が心地よく耳に響く中、周りを見渡せばブナ林の深緑が連なる稜線の先に青空が広がっている。あちこちから小鳥のさえずりが聞こえてくる。溪流沿いの1メートルほどの高さのフジバカマの先には薄いピンク色の花が咲き、その蜜に誘われてアサギマダラが舞っている。水素イオンに包まれ何とも気持ち良く、空気も美味しい。溪流釣りの解放感と醍醐味が凝集されたひとときである（写真-2）。

毎年、大学の溪流釣り部OB会がこの秘境の宿で開催されてきた。先生は私が創設した釣り部の顧問である。それからもう40年。部のモットーは、一人で出掛けない、危険だと感じれば勇気を出して引き返す、20センチ以下のイワナは放流する、ゴミは持ち帰る、の四つである。その後大きなトラブルもなく、今でも共に溪を歩いた10数名が集まる。それぞれ2～3名のグループに分かれてルアー、フライ、餌釣りを楽しむのである。

夜の会食では皆が持ち寄ったお土産や地方の銘酒、玄人はだしの自作のタモなどの大物賞の品々が並ぶ。

「みんな元気だったね、乾杯！」

先生の発声を合図にその日の話に花が咲く。そして解散前には必ず昔の思い出話が掘り起こされる。皆が学生時代にタイムスリップしてしまい、笑い声が宿にあふれる。先生はもちろん、今はそれぞれが様々な分野の専門家の集まりであり、たまに困ったときには頼りになる存在でもある。

私が宿の主人と初めて出会ったのは、私が20代前半の頃である。当時、主人は新婚ホヤホヤであったが、



写真-2 気持ちの良い早朝の溪流

今は大勢の孫に囲まれている。しかし、残念なことに体力的な面から来年には宿を閉めるらしい。夕食後、宿のおかみさんも加わり当時の思い出を語り合う。

「昔が懐かしいねえ。今まで良く続いたねえ！」

ご主人はその頃を思い出し、しみじみと懐かしんでいる。好きな趣味は全く苦にならないもので、私は継続しただけなのであるが。

釣り好きの私は、学生時代に山岳溪流の専門書が目に入り、イワナの存在を知った。非常に敏感で釣るのが難しく、大きいものは50 cmを超えと言う。そこで単身この秘境に乗り込み、帰りに偶然立ち寄ったのがこの湖畔の宿だった。夫婦で経営する宿は釣り具や食料品販売に加えて食事もでき、休憩や情報収集には持って来いであった。当時はイワナも豊富で、私はたちまち溪流釣りの虜となったのである。

現在、この地には数件の宿があり、それぞれが数棟のロッジで構成されている（写真—3）。中心部には総檜造りの共同温泉が構えており、その2階には大きく視界の開けた露天風呂が広がる。食後は、皆で風呂に漬かって満天の星空を眺めながら来年のOB会に思いを馳せた。



写真—3 秘境のロッジ

2. 社会人釣り会「青山雑魚の会」

いま、私の手元には「イワナ 秘境の追跡」（三樹書房）という本がある。カバーの上に巻かれた帯には、「釣歴50年の著者がイワナ釣りの技術や楽しさを語り、読者を深山幽谷に誘う興味あふれる書」とある。

この書は「青山雑魚の会」の会員であるN氏が1995年に上梓したものであり、読んでいて飽きない傑作だ。N氏によると、「この本は図書館では趣味の棚には無く、随筆のコーナーに鎮座している。」とのこと。皆に報告した際、少しはにかみつつもどこか誇らし気であった（写真—4）。



写真—4 N氏出版の「イワナ 秘境の追跡」

私が社会人となってこの会に誘われたのは、たまたま釣り会の会長を職場から駅まで送迎する機会があり、その際得意げに釣りの話をしたからではないかと勝手に思っている。入会時の会員は10名に満たず、私が最年少であった。当初は準備、段取り担当であったが、そのうち釣り計画も立てて道案内もするようになった。年に1~2回、南アルプス、奥志賀、黒部、奥只見、松枝岐などの溪流に泊りで出掛けた。振り返ってみると欠席者がいた記憶がなく、まさに釣りキチの集まりだったのかも知れない。会ではお互いを通称で呼び合うと言う約束事があり、私は名前のおりセン（泉）ちゃんと呼ばれた。私も全員をさん付けで呼ばせてもらった。前述の書には私もセンちゃんとして登場している。

渓での昼飯時、持ち寄った材料をそれぞれが手際よく調理する。皆私よりもかなり年配だが、手慣れた様子で楽しげである。広げたテーブルの上には、作り立てのソーメン、天婦羅、バタートースト、野菜サラダ、ケンチン汁、オニギリなどが並ぶ。焚火の脇では、釣れたてのイワナの串焼きの香りが空腹感を増幅させている。皆、箸を片手に至福の時である。

食後はそれぞれ水彩画を描く者、鳥や蝶を観察する者、写真を撮る者、中には尺八を吹く者までいる。山深い大自然の中で得られる非日常感や解放感は、人を



写真—5 溪の恵みを手に

引き付け、疲れを癒す溪流の大きな魅力である。同じ趣味仲間と溪流の恩恵にあずかることに感謝する（写真—5）。

昼も夜も楽しい語らひは続き、あちこちを歩いた昔の釣り談義は何度同じ話を聞いたことかと思いつつ顔には笑みがこぼれる。「釣りの話をするときは両手を縛っておけ」、ロシアの諺が頭をよぎる。釣り好きの作家、開高健もたびたび自戒していた。

親睦も深まり、会員諸氏の所属先などを知ったのは入会后10年以上が経ってからのことである。思えば、

本当に能天気だったのかも知れない。それ以降は沖（船）釣りにも出掛けるようになり、互いに気軽に会う機会も増えて趣味の恩恵を感じている。今では雲上の釣り人となった方もいるが、竿仕舞いをした方にもたまに会って教えを乞うこともある。釣りと言う趣味を通して長年築いてきた関係は掛け替えのないものであり、それぞれの人生を彩ってくれる。

—たにくら いずみ（一社）日本建設機械施工協会
施工技術総合研究所 技師長—

